

# 「日本の美」総合プロジェクト懇談会（第3回） 議 事 次 第

○日 時：平成28年4月7日（木）17：50～18：57

○場 所：官邸2階小ホール

○出席者：津川座長、串田委員、幸田委員、小林委員、千委員、森口委員

○政 府：安倍内閣総理大臣、馳文部科学大臣、世耕内閣官房副長官、  
兼原内閣官房副長官補、宮田文化庁長官、中岡文化庁次長、  
下川外務省国際文化交流審議官、安藤国際交流基金理事長、他

1 開 会

2 総理挨拶

3 議 事

○「日本博」について

4 閉 会

（司会：世耕内閣官房副長官）

1. 開会・総理大臣挨拶

冒頭、安倍内閣総理大臣より、以下のとおり挨拶があった。

文化を通じ、日本の魅力を発信することを外交の柱に据えていきたい。日本の文化芸術を強力に推進していきたい。そのような思いで、この懇談会を開催させていただいた。

これまでの会議では、文化芸術の振興や対外発信について、皆様からさまざまな御提案をいただいた。中でも、日本文化の粋を一堂に集め、その多様な魅力を発信する「日本博」の御提案は、日本の存在感を高める上で大変効果的であると考えている。

本日は「日本博」の具体化に向けて、御議論を深めていただくとともに、さまざまなアイデアも御提案いただきたい。

「日本の美」をしっかりと世界にアピールしていくため、委員の皆様には引き続き積極的に御意見を賜るようによろしくお願ひしたい。

(報道関係者退室)

## 2. 議事 (「日本博」について)

### (1) 政府側からの説明等

まず、松永内閣審議官より、資料1に基づき、これまでの懇談会における委員からの意見について、説明があった。

次に、下川外務省国際文化交流審議官より、資料2に基づき、これまでの懇談会の議論を踏まえた、「日本博」のイメージについて、説明があった。また、説明の最後に、「日本博」の推進体制について、以下のとおり言及があった。

- 「日本博」を企画・実行していくためには、大方針を示す、有識者を含めた委員会が必要ではないかと考えており、引き続き、懇談会の皆様方の御尽力をいただきたい。
- 政府としては、関係省庁・関係機関の連携を確保しながら、その具体的な企画・検討・準備を行う実行委員会的な組織が必要であると考えており、しっかりと準備を進めてまいりたい。

### (2) 意見交換

次に、意見交換が行われた。各委員等の主な発言は以下のとおり。

#### 【津川座長】

- 「願わくば花の下にて春死なん、その如月の望月のころ」。  
桜。日本のシンボルであり、春を代表する花、桜。人間と人間の社会がどれだけ変化しようと、春が来れば必ず桜が咲く。どんなことがあっても、守られる約束。義を重んじる、美しくもたくましい花。桜には、四季を迎え、送り出す、地球を動かしているような力強さがある。そんな桜を見て、日本人は、「何で、自分はこんなに悲しいのに、こんなにもきれいな花が咲くのか」と思う。これが日本の美意識、無常感である。
- 国際社会の日本の存在感の向上を使命とし、ジャポニズム2018を行いたい。  
「ジャポニズム2018」では、個別の作家やジャンルの展示をするのではなく、こうした日本の美意識そのものを提示したい。開催地は仮定であり、まだアイデアの段階のものとして考えている。

- 文化には経済力、軍事力以上の力がある。「あれだけの文化を持っている日本が、今、こう言っている」というふうになれば、日本のわずかな発言や行動が世界の人々の記憶に残るようになる。日本の美意識が世界に浸透するほど、「メイド・イン・ジャパン」と書かれたものの価値は高くなる。日本のサービス業も、そのよさを感じさせることができる。あらゆる活動の基礎となる力が文化の力である。あえて言う。「文化はもうかるのだ」と。
- 異物の混在と、その調和。例えば、食。ハンバーグもカレーもカツレツもラーメンもパスタもと、日本人は世界中の食をつくりかえ、取り入れてきた。文字もそう。平仮名、片仮名だけではなく、漢字もアルファベットも絵文字もと、今、この瞬間も使いこなしている日本語は際限なく増え続けている。何かを得るために何かを捨てることをしなかった国。その結果として、日本には驚くほど豊かな文化が生まれてきた。今、世界中の多くの問題が、異物を排除することで引き起こされている。一方で、異物が調和している日本の考えは、世界に気づきを与えるはず。
- 異物の混在と調和をベースとした文化をどう見せていけばいいか。日本人は、命が生と死の矛盾で支えられているように、あらゆる物事を互いに矛盾する、相反する2つで捉えてきた。いわば、絶対的な相対主義者。この日本人ならではの2つで1つという考えを展示に生かしたい。
- 1つの美意識をテーマに、2つずつ、多数の異ジャンルを展示することで、日本の美意識の奥深さを感じさせることができる。スティーブ・ジョブズは「禅」に影響を受けてiPhoneをつくり、もうけた。ロボットが優しさで世界を救う映画『ベイマックス』をつくったディズニーも「かわいい」でもうけた。「禅」や「かわいい」だけでなく「間」「素」「悪」「幽玄」「妙」、これらのまだ知られていない美意識でももうかる可能性がある。日本の美意識を武器にすると、文化はもうかる。
- 例えば、北斎のお化けの浮世絵と、今、流行の『妖怪ウォッチ』。ジャンルの異なる2つを同時に展示することで、日本人の美意識「幽玄」を伝える。日本人固有のあの世感、世界を席卷する可能性がある。イベント会場にて、月ごとにアニメーションの上映、能の上演、絵画の展示を行い「幽玄」を伝える。
- 「素」の美意識。日本のシンプルシティーが世界を魅了し始めている。相撲もすしも生身で勝負。相撲をホールにて開催、観戦前にすしを振る舞う、なはいしはホールの東西南北、四隅にてすし屋台を設置する。
- 「悪」の美意識。成熟した国に、必ず「悪」が格好いいという美意識が生まれる。歌舞伎とファッションショーを同じ舞台で行う。また、美術館においても2つずつ、多くの「悪」を展示する。

- 「妙」の美意識。いつの時代も異様かつ大胆にデフォルメされたフィギュアがうけている（「遮光器土偶」と「初音ミク」。）。美術館にて「妙」を2つずつ、異ジャンルで多数展示する。
- 「間」の美意識。現代演劇のようなシンプルな空間を客が囲む。そこには、初日は4畳だけの茶室が登場し、茶を体験する。2日目は128畳の柔道場に変わり、3日目は木を敷き詰めて能の舞台に、4日目は人形浄瑠璃、5日目は和太鼓、6日目は映画『東京物語』の上映というように、毎日、そこでは「間」の美意識というものが体験できるようにする。
- 「異」の美意識（「火焰土器」と「鬼瓦」）。本来の用途とは関係ない、不必要なまでの異物の美である。
- 「遊」の美意識。遊び心から生まれた軽い戯れ心がおもしろさを満喫したアートとなり、脈々と続いていく（「鳥獣人物戯画」と「風の谷のナウシカ」。）。文化は全てスタートにおいて戯れ心から出発し、非現実的境地へ、生と美のはらかな高みへと帰結する。いわば「嘘から出た誠」。
- 2020年はオリンピックに合わせて、地方×季節をテーマに、日本全国で1年間を通じて、いつ日本に来てでも必ずどこかでジャポニズムムーブメントが行われているようする。地方創生をばらばらでやってもうまくいかない。
- 訪日外国人は、8,000万人まで伸ばせると言われている。「おもてなし」がいいからと、高い飛行機代を払って来る人はいない。人が行きたくなる観光の4条件は、気候、自然、食、文化であり、日本には全て揃っている。
  - ・気候は、北海道でスキーをやった後、沖縄でスキューバダイビングが可能な寒暖の激しさ。
  - ・自然は、1キロ四方に多様な動植物が存在する、世界一の密度。
  - ・食は、世界遺産の和食はもちろん、ラーメン、カレーライス、洋食と、あらゆる料理がうまい。
  - ・文化は、ただいま述べてきたとおり。
- これらをしっかりとPRしていけば、8,000万人も夢ではない。「See」から「Do」へ。すばらしい風景を見るだけでなく、茶会の体験や和紙の製作、草木染め体験など、地域ごとに文化的アクティビティを800並べ、ジャポニズムツアー800として認定し、文化体験観光を促進する。
- そもそも、文化は国民福祉のためにあるもの。外に向かって日本文化をPRするだけでなく、内側で観光産業を振興し、観光地開発につなげていくことが肝要。もう一度言う。そうすると「文化はもうかる」のだと。

### 【千委員】

- 津川座長が発表されたジャポニズム2018は、内容としては非常に賛成。「日本博」をやることで、日本のステータスと文化の力を示すことができる。経

- 済と文化は表裏一体であり、ともに発展するためにも、こういう催しは大事。
- ただ、結局、何を見てきたか分からないで終わってしまっは大変もったいない。単なる博覧会ではなく、大変なことだが、モスクワ、ロンドン、あるいはニューヨークというところへ持ち出してやることも大事だと思う。
  - 1カ所でこれだけのものを行うのは、大変な場所と設備が必要になる。人数的にも時間的にも制限がある。このため、開催する主要都市を分けて、各都市の文化を開放し、皆さんに来ていただく。そういう流動性を持てば費用はかからないと思う。1カ所に集中的で博覧会をやるのではなくて、国内なら例えば、北海道から沖縄まで、それぞれの持つユニークさをその場所を出していく。
  - 生活文化に触れることは非常に大事。そうした内容をもう少しコンデンスして、部分的に持っていければ、効果は大変上がるもの。また、文化的にもうかるということにも結びついていくのではないか。
  - 経費を節減して、なるべく多くの方に来ていただいて、また、その中で皆さんが満足してもらおう。どこかでさっと触れ合うことが「おもてなし」の大変大事なことで、そういうことを、日本人にもっと意識的に高揚させるためには、分散的な「日本博」というものをやることは大変大事である。

#### 【安藤理事長】

3点ばかり、留意点として申し上げたい。

- ①日本が各国でやっている周年事業を見ても、行事のテーマや哲学、統一性が若干欠如している気味がある。財政的、物理的に実施可能なものからやっていくことになると、ごった煮的なものになってしまい、哲学やコンセプトが希薄になるところがある。やはり統一的なテーマのもとに、伝えるべきメッセージを日本としてきちんと伝えていく。日本として主体的にプランニングを行っていくことが必要ではないか。
- ②海外で実施する場合には、相手国とのコラボレーション、協力が根底にあるべき。会場の確保等で、先方国の協力は不可欠。何よりも、相手のニーズもよく伺い、敬意を払って実施していくことが必要だと思う。我々の文化を紹介していくときに、相手国の文化人の方の解説があると、非常に効果的。
- ③広報は極めて大切。行事の事前と事後、それから、相手国の中と日本と、両方が必要だと思う。相手国の場合には、たとえ来ない人であっても、開催していることは知っているようにするための広報が必要。それから、日本国民が、こういうことをやっているのだと認識するための広報が必要。

### 【串田委員】

- 1991年の素晴らしい、奇跡的な条件のそろったロンドンの「日本博」のことを、イギリス以外の国の人、日本人も含めて、多くの人知らなかったことは問題だと思う。参加した方は知っている。でも、世界では誰も知らないというのは、どう解決したらいいのか。
- 日本人が西洋の文化を受け入れて自分のものにしたように、世界の人々にも、どうすれば日本文化に興味を持ってもらい、受け入れて共有してもらえるか。
- シェークスピアのギリシャ悲劇は、世界中でやっている。しかし、イギリス人のまねではなく、その国の形に昇華し直している。それを見て、イギリス人は、ある意味では「目からうろこ」で、こういう解釈もあるのだということもある。ピーター・ブルックは、中世の時代、シェークスピアの時代の感覚がわかるのは日本人ではないかとおっしゃった。もしかしたら日本の文化も、どこか違う国のほうが、もっと深く理解してしまうことはあり得る。
- 歌舞伎も、時代毎に、観客にうけなければならないと変化させていった。そのことで原作が変わっていくこともたくさんある。どちらがいいとか悪いかではなくて、いろいろな見方がある。そういうことを共有できるように仕掛けていくことが大事なのではないか。

### 【小林委員】

- 美術や文化財を、いかに理解してもらおうかについて、工夫がおろそかにされてきたと感じる。ニューヨークのメトロポリタン美術館では、実物大の馬の模型によろいかぶとをまとった武将がやりを持って乗っており、腰には刀を差している。その傍らに武装の展示をしている。侍がどういう格好をして、どういう働きをするかが、わかりやすく展示されている。しかし、日本の美術館・博物館では、そういう展示はほとんどされていない。美術品や文化財を単に並べるだけの展示では、文化の異なる相手国、現地の方々に伝わらない。従来の美術展示や文化財展示を考え直す必要があるのではないか。

### 【幸田委員】

- ロンドンのブリティッシュ・ミュージアム（大英博物館）には、日本セクションというフロアがあり、非常に盛況だった。日本文化に対する関心の高さを改めて感じた。文化国家としての文化資産がすごいパワーになっている。各国の皆さんからリスペクトを得ているというのを実感し、「日本博」が提唱されているのはとてもいいタイミングだと思う。座長のプレゼンテーションも非常に感銘を受けた。相対する2つの要素、全く逆の視点を並立させるというのは、とてもいいコンセプトだと思う。

- 平和への働きかけや自然保護に対して国が出すメッセージを、ソフトパワーとして、文化の発信の中で込められないか。ブリティッシュ・ミュージアムに、現代作家による富嶽三十六景のカバー作品で、すべてから富士山の姿を消して描くという試みをした作品を見たが、東日本大震災を経て、自然が欠けたときに、どういう喪失感があるかということ、版画で訴えていた。斬新な発想で、一つの哲学、メッセージだと思った。日本の文化を発信すると同時に、自然保護に向けての大きなメッセージ性も持たせており、こういう表現方法もあるのだなと思った。
- いわゆる新興国でも、日本の文化に対する関心がすごく高い。日本博では先進国だけに絞るのではなく、そういった新興国の方たちも中に取り込むような視点もあったらいいのではないか。
- 今、シェアリングエコノミーという概念が出てきている。つまり、買い手も売り手になれる。従来のサービスの受け手だった側もサービスの提供者になれる時代が始まっている。これはSNS、ソーシャルメディアが発達して生まれた発想であり、新しいビジネスモデル。日本博でも国民全員、世界中を巻き込めるように、こういう手法でシェアすることが一つのキーワードにできないか。
- 1964年の東京オリンピックは、日本人一人ひとりが、国家的イベントを成功させるために、自分は何ができるだろうか、何が貢献できるだろうかということ考えた。戦後の復興を経て、日本人としての誇りを取り戻そう、自信を取り戻そう、国際社会に向けてのメッセージを発信しようと、そういう強い思いがあった。今回も、震災が起こったということもあるし、全ての人が参加できる、気持ちの上でも貢献できるという思いを共有することが大事。そういう意味で、今回の「日本博」のイベントの一つについて、国民からお金をほんの少しずつでいいので寄せていただき、サポートしてもらおうという試みはできないだろうか。お金を出しあうことで皆真剣になり、成果も気になり、応援もしたくなる。

#### 【森口委員】

- 日本では、工芸というと一応その立場があるが、海外ではマイナーなアートになっており、絵画や彫刻と大分差がついている。そこで、「インテリジェンス」という、新しい、人間の英知という考え方を前に出し、近代の名建築と言われる法務省本館の手づくりれんがの建物に、日本が大切にしなければならない手づくり文化の英知、パフォーマンスアートの英知も含んだ博物館、「ミュージアム・オブ・インテリジェンス」を作りたい。これは、2020年に向かっての歩みの中で、将来の文化を担う、そして「日本博」の大きな屋台

骨の一つになるもの。思想や哲学が具体的な形になってくると思うし、世界中の人々にも楽しんでもらえると思う。

○最後に、「ミュージアム・オブ・インテリジェンス」の設置の意義について、私が尊敬している民俗学者、元京都府の教育委員会の文化財保護の技官をしていた方の言葉を紹介させていただきたい。

- ・我々の暮らしは今、大量生産大量消費という使い捨て文化に席卷されている。あふれる物と引き替えに、生命を脅かす深刻な問題をひきよせている。何をもって豊かというのか。われわれはその根源から自らを問う必要に迫られているといえよう。
- ・工芸は人々の「わざ」の連鎖の上に開花するものである。先人達が積み重ねてこられた「ものづくり」への情熱は計り知れない大きさを持ち、連綿と継承されてきた自然との共生思想に、今も学ぶべきところが限りなくあると確信します。
- ・手わざの文化は物を生かす文化である。手わざの仕事は五感を動員して物に問いかけ、物の声に耳を澄ますところで最良の成果をあげる。手わざの仕事は物と物、物と人との交流を基盤として、原材料や道具、それらの統合ともいべき工芸作品に至る「わざ」の連鎖によって成り立つ文化である。いまそれが大きな危機に直面している。手わざの文化に込められた人類の英知に学び、その知恵を現代にいかに活かすか。

#### 【串田委員】

- 共通のテーマをはっきりさせることを先にするべきではないか。
- 文化については、「もうかる」という言葉よりは、「豊かになる」という言葉があう。文化の根底にある精神は何なのか。経済や生活、心。文化を通じて、いろいろなことが豊かになる。人のつき合い方も豊かになる。だから、「豊かになる」ということが文化に似合うのではないかと思った。

#### 【津川座長】

- 2018年に開催するとすれば、会場の確保などが大変ではないか。実際におやりになった経験から、教えてほしい。

#### 【安藤国際交流基金理事長】

- 1991年のジャパンフェスティバルの場合には、本格的な準備に入ったのが1988年なので、それから数えて3年。それでも非常に窮屈であった。会場の確保に一番困難を来すのは美術館。特に欧米、パリやニューヨーク辺りの、



2018年の企画はほぼ固まりつつある。だから、美術館も相当無理をしてあげてもらわないと難しいと思う。他方、演劇などは、1年前でも可能であり、2018年であれば十分やれると思う。ただ、美術館の場合には、例えば国際交流基金がフランスで行ったジャポニズム展は、構想から実現まで5年かかっている。それは極端な例としても、やはり2年というのはぎりぎりである。

### 【馳文部科学大臣】

○オリンピックの招致本部長として、世界中を回ったとき、非常に関心を持たれたことがある。日本人は、東日本大震災であれだけの被災に遭ったのに、なぜ、暴動が起きたり、混乱したりしていないのか。なぜ、みんな被災者であるにもかかわらず、あれだけの精神性を保って、復興に向けて頑張れるのかと。言われて、改めて気がついた。こうした一つの精神性というところが、日本の美意識の象徴ではないかと思った。

○前回より、文部科学省で3点、文化にかかわる問題があったので報告したい。

①総理にも御尽力いただいて、文化庁が京都に移転することになった。

②4月1日に、宮田亮平文化庁長官を任命させていただいた。

③同じく4月1日に、前のパリで日本文化会館の館長をしていた竹内佐和子さんを、文科省の顧問として迎えることになった。

体制を整えて、またこのプロジェクトを支えていきたいと思うし、当然、関係省庁と連携をして取り組んでいきたいと思うので、今後ともよろしく願いたい。

### 【宮田文化庁長官】

○文化と経済が一体になったときに、文化は、生き生きと輝き、ときめきを世界に広げていくことができる。今までの日本の文化に対する考え方は、見に行かせてもらう、見せてもらうという謙虚なものであったが、経済というものは、実際に自分が汗をかかない限り、自分のところには入ってこない。このため、「もうかる」という言葉を座長がおっしゃったのは、ある意味衝撃的で、新鮮だった。そして、串田委員は「豊か」とおっしゃった。これも新鮮。しかし、どちらも遠慮し過ぎである。もっと明快に「文化と経済は一体」と言ったほうがいい。

○いい作品は必ず、いい材料を使っている。そして、いい材料にはお金がかかる。しかし、いい材料は永遠に残る。つまり「いいものを残しましょう。そのためには稼ぎましょう。」という視点が大事だということ。

○稼ぎ、いい材料を使うためには、サイエンスが必要。アート、サイエンス、マネジメント。この3つの輪ができ上がったときに、何事もできる。ただ、

この3つの輪は、なかなか秩序をつくるのが難しい。しかし、それをやれるのが、私ども日本人であると思っている。そこをクリアしていくために、「日本博」をやっていく。例えば、来た人が、ただ「きれいだな」と見るのではなく、「私の会社に持ってくれば、これはもうかる作品になる」という見方ができるようにする。万博やモーターショーに、あれだけの人が来るのは、そこに対価価値があるから。多くの方々が、「文化は対価価値がない」という見方をしており、「文化にどんなにお金をかけても無駄である」という考え方になっているとすれば、その考え方は決して正しいとは思わない。

#### 【森口委員】

- 私は「もうかる」という言葉には少しひっかかる。江戸初期の上方文化は素晴らしいが、それを象徴する挨拶の「もうかりまっか」は「お元気ですか」という挨拶のようなもの。今日のお金ばかりの消費文化の時代に、前面的に「もうかります」というのは少しふさわしくないかなど。何が日本らしいかといえば、最後はディーセンシーだと思うので、よろしくお願ひしたい。

#### 【安倍総理大臣】

- 本日は「日本博」について、津川座長をはじめ、委員の皆様から、どういう哲学でやっていくかということも含めて、さまざまな具体的な御提案をいただいた。
- 本日のこの議論を踏まえて、日本が誇る文化芸術の力を総結集して、2018年を目安に「日本博」を開催すべく、政府一丸となって取り組んでまいりたい。
- 外務省、文化庁をはじめとする関係省庁においては、「日本博」の実現に向けて、オールジャパンの体制を構築するとともに、必要な予算措置も含め、スピード感を持って準備を開始するよう、指示したい。
- 「日本博」の開催都市については、本日の御議論も踏まえ、「日本博」の発信効果、外交上の意義等の観点も踏まえつつ、検討したいと考えているので、引き続きよろしくお願ひしたい。

### 3. 閉会

最後に、世耕副長官より、次回日程等について以下のとおり説明があり、閉会となった。

- 本日、「日本博」について、皆様方からたくさんの御意見を頂戴した。いただいた御意見も踏まえながら「日本博」の実現に向けて取り組んでまいりたいと思うので、引き続き御指導・御助言のほどよろしくお願ひしたい。

- 次回の懇談会については、委員の皆様の日程を調整させていただいた上で、改めて御連絡をさせていただきます。
- 本日の議論の内容については、速やかに、ホームページに議事要旨を掲載させていただきます。

(了)